

## □ギルドマスター緊急評議会 (written by BLUE panda)

オーディオバースにギルドマスターたちが集う。誰一人無駄口をきく者はおらず、事態の深刻さをうかがわせる。初めに口を開いたのは、NTPのギルドマスターの一人、ライトと呼ばれる PUNKS であった。

「まず、DENNOWのTTT、なぜ指名手配されることがわかったんだ？これは間違いのない情報なのか？」

TTTと呼ばれたDENNOWの女性ギルドマスターは自分たちの提供した情報に再確認を求めるNTPに対し、情報の虚実を問われたのかと思ったのか、少し機嫌を損ねたように答える。

「政府要人のPCをハッキングするのが趣味なの。その中で思いのほか偉いやつがヒットしたから詮索してたのよ。それで今回の件が判明したわけ。実際に、国会で新たな刑法の改正が可決されたでしょう？疑いの余地はないわよ。もうすでに、我々は監視されていると思っておいたほうがいいわ。まあ、さすがにオーディオバースまでは確認してないでしょうけど」

オーディオバースは音声のみのメタバースである為、それぞれの表情を確認することはできない。しかしそれでも、この評議会に参加する全ての者から固唾をのむ音が聞こえたと錯覚するほどに、緊張感と絶望感がこの空間を包み込んだ。

「そうか…。ありがとう。それで、いただいた情報についてだが、Wanted TellerというプログラムにDENNOWが開発したハッキングプログラムを仕込めばいい、との事だったな。もう少し詳細を教えてくれ。ブレインバースへの侵入方法、Wanted Tellerにハッキングプログラムを仕込む方法など、難題が多すぎる」

「まず、Wanted Teller。これは前述した通り、政府要人のPCにハッキングを仕掛けた時にその存在が確認できたの。こいつはあくまでプログラムだけど、ご存じの通りBrainVerseでは実体を持つわ。その外見は不明。ただ、BrainVerseの《危機管理室》と呼ばれる空間で活動しているみたい。まだ我々も、危機管理室がBrainVerseのどこにあるかまでは突き止められていないわ。

それとハッキングプログラムだけど、これもプログラムだから、勿論この世界で実体は持たない。でも、BrainVerseでは《B-Tablet》の形状となるようにプログラムしてあるの。これを、みんな大好き《BrainWash》と混ぜることで、ハッキングプログラムが発動するようになっているわ。あとは、B-Tablet入りのBrainWashをWanted Tellerに飲ませるだけ。どう？簡単でしょ？

これに関して注意点が2つ。1つ目は、B-Tabletはそれ単体では効果がないから、必ずBrainWashと混ぜる事。2つ目が…少しだけ難しいんだけど、B-Tabletは単体では効果が表れないから、BrainVerseのセキュリティプログラムに検知されないの。でも…」

「BrainWashと混ぜたら効果が表れるから、セキュリティプログラムに検知される…か」HOPEのギルドマスターであるandyが、TTTの言葉を遮る。それは誰かに向けて放った言葉ではなく、自身の中でつぶやき、その解決方法を探っているように見えた。

「あら、さすがHOPEね。その通り。…賢い人は嫌いよ」

冗談なのか本気なのか、オーディオオバースではその本心は量れない。TTTは話を続ける。

「HOPEのandyが仰ったとおり、B-TabletをBrainWashに入れて数十秒後にハッキングプログラムが発動するの。つまりBrainVerseのセキュリティプログラムに検知される。こうなれば、BV POLICEが駆け付けるのも時間の問題よ。あとはどうやってBrainVerseからログアウトするか…。まあ居場所もわからないWanted Tellerまでたどり着くこと自体、かなり危険な賭けだけど」

TTTの言葉を最後に、ライトを含む全てのPUNKSが沈黙する。そして誰もが口を開く事ではなく5分が過ぎようとする頃、ひときわ若くて青い声の持ち主が口を開けた。

「あの…。俺ら、絶対に成功させて見せます。BrainVerse本体を殺すことはできないかもですけど、Wanted Tellerとかいうやつぐらいだったら必ずブツ潰してやります。皆さんは、俺らと違ってBrainVerse破壊の為に必要な存在ですから、こんなことで消えちゃならない人たちです。でも俺らは違う。守るものがないから、捨てるものしかないから、全力で突っ込みます。PUNKSを救います。だから、お願いします。どこのギルドでもいいんで、俺らをBrainVerseへ送り込んでください」

あまりに明瞭でまっすぐで、そして悲しい声はJokersの「ミット」と呼ばれる少年から発せられたものだった。JokersはGuildではないが、その圧倒的な人数でアグレッシブなAnti-BrainVerseコミュニティを形成していた。それを束ねる代表がこのミットだという。ギルドマスター評議会にも毎回参加するほど各GUILDにも認められており、Jokersをただの不良集団からAnti-BrainVerse Guildの一端を担う集団へ昇華させた功労者である。

このまっすぐな少年の声を聴き、不穏な感情で包まれていたオーディオオバースが一転。空気と感情を一刀両断したように良い意味で張り詰めた空間となった事が、参加する全てのPUNKSに伝わった。

すると、XXギルドのカニングが口を開いた。

「…いやあ、面白いね君っ。今までただの子供だと思ってたけど、言うときはちゃんと言うんだねえ。尊敬しちゃったよ。よし、僕が XX ギルドの皆に話を付けといてあげるから、あとで連絡してきな。うちは BrainVerse 侵入の技術を持ってるから大丈夫だよ。おかげさまで、僕もやる気になってきたよっ」

「えっ、本当ですか？ありがとうございます！さっそく Jokers の皆に報告してきますっ」  
そう言うと、ミットはオーディオバースからログアウトした。

「あーあ、行っちゃった。こういう無鉄砲なところも、なんだか好きになってきたよ。じゃあライト、皆さん、僕も失礼するね。また何か決まったら教えてねっ」  
カニングも続けてログアウトする。

ミットとカニングのやりとりを聞いて緊張の糸が切れたのか、各 GUILD からそれぞれ談笑するような声が聞こえてきた。

「それではギルドマスターの皆様、本日の緊急評議会はこれで閉会とします。BrainVerse への侵入経路を確立していないギルドもあるだろうから、各自同盟や協力要請を結ぶように。…この作戦は、正直かなり危険だ。しかし、今後の我々の活動だけでなく、PUNKS の未来がかかっている最重要課題であることは間違いない。勿論、NTP ギルドは参加する。…各 Guild、検討を祈る。」  
そう言うとライトはログアウトした。それに続き、次々とギルドマスターたちがログアウトし、評議会が開かれていたオーディオバース空間からは誰一人いなくなった。

…全員がログアウトした瞬間、その誰一人いなくなった空間に音声が流れ始めた。

Capture…………Capture…Capture……………Capture……………Capture……………Capture…  
…………Capture……………Capture……………Capture……………Capture……………Capture……………